

第26回情報知識学フォーラム予稿

起業家との対話の逐語記録の作成と蓄積についての現状と課題

Current status and issues regarding the documentation and accumulation of verbatim records of dialogues with an entrepreneur

伊藤智明^{1*}

Chiaki ITO^{1*}

1 京都大学大学院経営管理研究部

Graduate School of Management, Kyoto University

〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町

E-mail: ito.chiaki.3z@kyoto-u.ac.jp

*連絡先著者 Corresponding Author

研究者は、自らのキャリア形成と共に、研究データを組織化し、研究成果を上げて、さらには、研究データを活用し、研究成果を社会実装する、という緩やかな循環をつくることになる。したがって、研究データの組織化と活用は、自らがいかに、どのような研究成果を上げて、研究コミュニティに貢献し、研究者として生存していくかを構想する上での重要な論点の一つとなる。また、研究成果の社会実装を目指す上でも、研究データの組織化と活用は、外せない論点の一つである。本発表では、私がこれまでに行ってきた起業家との対話の逐語記録の作成と蓄積を事例に、研究データの組織化と活用の取組みを紹介する。事例の紹介にあたっては、起業家との対話の逐語記録の作成と蓄積についての現状と課題を提示する。

As researchers develop their careers, they will create a gradual cycle of organizing research data, producing research results, utilizing the research data, and implementing the research results in society. Therefore, the organization and utilization of research data are the most critical issues to consider when envisioning producing research results, contributing to the research community, and surviving as a researcher. In addition, the organization and utilization of research data are some of the issues that cannot remain unanswered when aiming for the social implementation of research results. In this presentation, we will introduce our approach to the organization and utilization of research data, using as a case study the creation and accumulation of verbatim records of dialogues I have had with entrepreneurs. Furthermore, this presentation will present the current status and challenges of creating

and accumulating verbatim records of dialogues with entrepreneurs.

キーワード: 起業家との対話の逐語記録, テキスト, 構造化, 公共化

Verbatim records of entrepreneurial dialogues, Text, Structurization, Publicization

1 はじめに

本発表では、私がこれまでに行ってきた起業家との対話の逐語記録の作成と蓄積を事例に、研究データの組織化と活用の取組みを紹介する。なお、本発表における起業家は、事業機会を探索、発見、創造すると共に、自らが認識した事業機会を実現するための資源を探索、発見、創造する人びとを指す[1]。また、筆者の研究上の関心は、ベンチャー企業の創業期の起業家の省察プロセスを明らかにすることにある[2][3]。ここで省察とは、行為の意味を吟味することである[4]。

2 起業家との対話の逐語記録の作

成と蓄積についての現状

2.1 起業家との対話の逐語記録

私は、一人の起業家と2011年4月に対話を「ことばの交換」と名づけて、開始し、現在までにその同一の起業家との対話を49回実施してきた。また、これからも継続予定である。

2012年3月に実施した第10回「ことばの交換」以降、この対話で起業家と私が話したことは、ICレコーダーで録音し、その後、文字に起こし、逐語記録として保管されている。ICレコーダーを使用する以前の対話については、起業家の発言をノートパソコンでタイピングしたものが逐語記録として保管されている。

私が起業家と対話し、その逐語記録を作成し、蓄積してきた理由は、起業家との対話の逐語記録が「ベンチャー企業の創業期の起業家は何を考え、何を言い、いかに意思決定しているのか？」という問いに答えるための資料になると考えたからである。さらに、起業家との対話の逐語記録の作成と蓄積にコミットしている私自身の関心を一言で表せば、「組織の前の組織」になる。組織は、「2人以上の人々によって担われた、意識的に調整された活動や諸力のシステム」と定義され、人間、物的システム、社会的システムと共に、協働システムを構成する[5]。この協働システムのサブシステムとしての組織がつくられる過程に興味を持ったわけである。

2.2 起業家との対話の逐語記録の構造化

私が作成し、蓄積している起業家との対話の逐語記録は、起業家の省察についてのテキストであり、ログデータである。逐語記録は、一方で、「広義の言語（記号）で語られたもの、あるいは書かれたもの」[6][7]であり、他方で、確かに取得時点で十分に構造化されていない、大量のノイズが含まれる人間の自然な行動記録となっている[8]。

とは言え、私は、調査初期の時点においても完全に構造化されていない、ノイズばかりのログデータを取得しようと思っていたわけではない。

起業家との対話の逐語記録をいかに構造化するかを検討し、調査初期の時点で起業家との対話の逐語記録を構造化する手順を定めた[9]。また、対話での起業家の発言と研究者として対話に参加する私の発言の記録が、起業家の省察についてのテキスト、ログデータになり、かつ、「起業家の省察を研究する私」についてのテキスト、ログデータになると見据えていた[10]。

起業家との対話の逐語記録の構造化にあたっては、「カード法」と「質的研究における対話的モデル生成法」を参照した[6][7][11]。これらの方法を参照したのは、テキストとしての逐語記録を構造化するためである。ログデータとしての逐語記録の構造化には、別の方法が必要となる。テキストとしての逐語記録を構造化している場合、私が取組んでいる一連の研究は、質的研究、もしくは、ナラティブ研究と見なされることになる[12]。ログデ

ータとしての逐語記録を構造化していくならば、その一連の研究は、量的研究、もしくは、実証研究と見なされることになるだろう。

テキストとしての起業家との対話の逐語記録の構造化については、基本的な手順を以下に示せる。文字起こし、校閲（音声記録と文字起こしされた逐語記録の照合）、切断（意味内容のまとまりで段落を分ける）、見出し（段落ごとに見出しをつける）の4つの作業である。文字起こしと校閲の作業で作成される逐語記録が一次テキスト、切断と見出しの作業で作成される逐語記録が二次テキストである。

見出しは、まず、起業家が実際に用いる言葉でつけるようにした。その上で、さらに、「研究者である私」の言葉で見出しをつけたり、逐語記録の構造化を行う中で気づいたことを記入したりすることもあった。資料1は、二次テキストの例である。

★11-133【「業界が変わる」や「暮らしが変わる」を幹にしたがってしまう（幹の部分とは、自分ひとりでは、どうにもできない世界のこと⇒「言葉の交換」という取組みを通じて、経営学が変わることも含まれる）：日常に根ざした経営学】

つつい、暮らしが変わるとか、業界が変わるを幹にしたがっちゃうんですね。わたしも、そうだったので、なんですけど、そこは気づきましたね。業界が変わるとか、暮らしが変わるとか、そんなんって、全部、枝葉末節だったんだ。もっと根幹的な部分、幹の部分、幹の部分が変わっていかないといけない。幹の部分が変わっていかないといけないというのは、わたしひとりなんかで、どうもできない世界なんですけど、もっと言うと、あれですよ、この取組みもひとつなんですよ。経営学とか、の概念も、もっと変わらないといけないし。その事業っていうものの、その、学生とか起業家の理解ももっと変わらないといけないし。地域の理解も変わらないといけないし。

資料1 二次テキストの例：第11回「ことばの交換」の133枚目のカード

2.3 起業家との対話の逐語記録の公共化

テキストとしての起業家との対話の逐語記録は、構造化するだけでなく、公共化していく必要がある。逐語記録を公共化するのは、対話的省察性を担保するためである[6][7]。

対話的省察性は、「自己のテキストや解釈を、対話的に『公開』し、互いのテキストを『読む』『交換する』『読み直す』作業を通じて、ズレや相違や変化プロセスを含みながら『公共化』すること」を目指すための基準である[6][7]。質的研究における対話的省察性は、量的研究における信頼性の基準に相当する[6][7]。科学の基本である再現可能性を担保しながら、質的研究の良さである意味のある違いや変化を重視するために、私たちは対話的省察性の基準を採用する[6][7]。

起業家との対話の逐語記録の公共化について、私が工夫したことや、現時点でできていることを以下で紹介する。

まず、起業家との対話は、私が依頼するのではなく、起業家からの打診があって、実施することになっている。また、対話の実施や逐語記録の作成については、顧問契約を締結するなど、対価を受け取るようにしている。対価を受け取ることで、起業家は自らの起業活動の一環として、自らの実践をより積極的に省察するようになる。

起業家との対話の逐語記録の公共化は、現時点で次の2つのレベルで行われている。第一に、対話の参加者である起業家と私の範囲での逐語記録の共有に伴う公共化である。各回の対話の実施後、一次テキストと二次テキストを作成し、起業家へ送付する。この逐語記録（一次テキストと二次テキスト）と音声記録のファイルは、起業家と私はいつでもアクセスできるように、クラウドストレージにアップロードされている。

第二に、研究論文の執筆や公刊に伴う公共化である。起業家との対話の逐語記録を用いて、研究論文の執筆を行うには、一次テキストや二次テキストから三次テキスト（例：分析ワークシート）、四次テキスト（例：事例記述）、モデルを生成することになる。モデルは、「現象を相互に関連づけ包括的にまとめたイメージを示すと共に、そのイメージによって新たな知活動を生成していくシステム」と定義される[13]。研究コミュニティにおける査読をクリアし、研究論文を公刊するためには、例えば、起業家の省察プロセスについての分析を行い、事例記述をし、モデルを生成し、既存の理論と比較することで学術的な貢献を示す必要がある。研究論文の執筆や公刊に伴い、起業家との対話の逐語記録は、学術雑誌のエディター、レフェリー、読者に限定的ではあるが、共有されることになる。

3 起業家との対話の逐語記録の作

成と蓄積についての課題

本節では、起業家との対話の逐語記録の作成と蓄積についての課題を提示する。なお、ここでの課題は、本研究プロジェクトの構想と前節で提示した現状を踏まえて、共同研究と研究資源アーカイブ化についてのものを挙げる。

3.1 共同研究

最初の課題は、共同研究に伴う起業家との対話の逐語記録の構造化と公共化に関わる。

私は、共同研究者にテキストとしての起業家との対話の逐語記録を共有し、共同研究者が彼ら彼女ら自身の関心で逐語記録を読み込んでくれることを希望している。

しかしながら、彼ら彼女ら自身の関心と逐語記録をつなげることは、以下の2つの点から難しいようである。

まず、事象の帰結が明らかではないこと（かつ、膨大な量の逐語記録があること）に起因する。起業家との対話は、継続中であり、また、起業家は、現在も起業活動を継続している。したがって、例えば、経営学分野の研究者が多く用いるインタビュー調査（例：帰結が明らかになっている事象の因果関係についての見通しを持った上でのインタビュー調査）の手順と対話の逐語記録を読み込み、研究成果にまとめていく手順は、微妙に、かつ決定的に異なるようである。こうした違いを踏まえて、共同研究者と私の役割分担を微調整したり、研究成果にまとめる手順を提示したりする必要があるだろう。

次に、共同研究者が、起業家と私の対話（すなわち、相互行為）に参加していないことに起因する。起業家と私の対話は、10年以上、継続している。したがって、この対話で重視している価値観や前提、起業家の価値観や前提、私の価値観や前提は、起業家と私の間で相互に了解されてしまっている。さらに、私は、これまでの対話の経験から起業家の価値観や前提、および、状況や文脈の変化に敏感に対応する必要性を感じている。共同研究者は、当然、こうした私の価値観や前提と異なるものを有しているだろう。共同研究者と私の違いを克服するためには、何らかの協働モデルが必要になる。

3.2 研究資源アーカイブ化

次の課題は、研究資源アーカイブ化に関わるものである。

私たちが作成し、蓄積してきた対話の逐語記録は、企業家史や経営史の研究資料となる

可能性もあるだろう。

対話の逐語記録を研究資料として同時代や後世に生きる人々へ伝承、継承するために、クリアしなければならないことも多い。

例えば、研究資源アーカイブ化についての合意を起業家や関係者といかに形成するかである。対話では、起業活動に関わる深い省察が行われているため、逐語記録を公開することで、起業家や関係者にネガティブな影響を及ぼすことが想定される。公開に向けて、どのような加工をすればいいのかなど、詳細についての検討を重ねる必要がある。

また、研究資源アーカイブ化に伴う作業や研究資源アーカイブ化後のメンテナンスや諸々の対応にどれぐらいの費用がかかるかも検討する必要がある。

4 おわりに

研究データの組織化と活用は、研究戦略の根幹と関わる。

研究者は、自らのキャリア形成と共に、研究データを組織化し、研究成果を上げて、さらには、研究データを活用し、研究成果を社会実装する、という緩やかな循環をつくっていく。したがって、研究データの組織化と活用は、自らがいかに、どのような研究成果を上げて、研究コミュニティに貢献し、研究者として生存していくかを構想する上での重要な論点の一つである。加えて、研究成果の社会実装を目指す上でも、研究データの組織化と活用は考慮しなければならない。

研究データの組織化と活用については、私たち研究者が一人一人、自らがいかなる研究戦略を構想し、研究活動を遂行するかを問いながら、これからも考えていかなければならない。

謝辞

本発表は、科研費19K13773の助成と野村マネジメント・スクールの研究助成（2019年度）を受けて進められた研究成果の一部である。ここに記して、感謝の意を表したい。

参考文献

- [1] Penrose, Edith (日高千景訳) : 「企業成長の理論」, 第3版, 東京, ダイヤモンド社, 374p., 2010.
- [2] 伊藤智明; 足代訓史; 山田仁一郎; 江島由裕: 「企業家による事業の失敗に対する意味形成プロセスの解明: 省察的対話における語り直しとスキーマの更新に着目して」, *Venture Review*, No.27, pp.15- 29, 2016.
- [3] 伊藤智明: 「創業経営者による使用理論の省察と経営理念の制作: 創業期のベンチャーにおけるアクション・リサーチ」, *組織科学*, Vol.51, No.3, pp.98- 108, 2018.
- [4] 佐伯胖: 「リフレクション(実践の振り返り)を考える: ショーンの『リフレクション』論を手がかりに」, 『ビデオによるリフレクション入門: 実践の多義的創発性を拓く』, 東京, 東京大学出版会, pp.1- 37, 2018.
- [5] Barnard, Chester (山本安次郎, 田杉競, 飯野春樹訳) : 「経営者の役割」, 新訳版,

東京, ダイヤモンド社, 408p., 1968.

[6] やまだようこ: 「質的研究における対話的モデル構成法: 多重の現実, ナラティブ・テキスト, 対話的省察性」, *質的心理学研究*, No.6, pp.174- 194, 2007.

[7] やまだようこ: 「質的モデル生成法: 質的研究の理論と方法」, 東京, 新曜社, 384p., 2020.

[8] 村瀬俊朗; 王へキサシ; 鈴木宏治: 「アンケート調査を越えて: 自然言語処理や機械学習を用いたログデータの活用を模索する」, *組織科学*, Vol.55, No.1, pp.16- 30, 2021.

[9] 伊藤智明: 「アントレプレナーシップの実践家と研究者との対話記録法の開発」, *神戸大学大学院経営学研究科大学院生ワーキング・ペーパー*, 15p., 2014.

[10] 伊藤智明; 福本俊樹: 「起業家と研究者の関わり合い: 起業家研究の方法としての二人称的アプローチと共働的な道具」, *企業家研究*, No.18, pp.23- 40, 2021.

[11] 梅棹忠夫: 「知的生産の技術」, 東京, 岩波書店, 254p., 1969.

[12] やまだようこ: 「ナラティブ研究: 語りの共同生成」, 東京, 新曜社, 504p., 2021.

[13] やまだようこ; 山田千積: 「対話的場所モデル: 多様な場所と時間をむすぶクロノトポス・モデル」, *質的心理学研究*, No.8, pp.25- 42, 2009.